

裏 切 り の 寓 意

— *The Complaint unto Pity* の解釈 —

西 田 栄 毅

チャーサーの小作品が読まれる場合、『カンタベリー物語』や『トロイルスとクリセイデ』等との比較、あるいは副次的なものに関心が向けられて、詩自体に内包されている独自の価値が等閑視される嫌いがあるように思われる。¹⁾ そういう通患を排した解釈の例として、Malcolm Pittock の *The Complaint unto Pity* に対して示した読みの姿勢があげられる。²⁾ 最近では Charles J. Nolan, Jr. が、そういう批評態度を持してこの詩の読みに臨んでいる。³⁾ その態度やよしとするにしても、二人の観点からではどうしてもこの詩が表現上の矛盾を含むのを余儀なくされる。その観点の問題点は、寓喩形象が語り手の相手の女性の属性と措定されたり、詩的表現が経験的現実の世界の論理で解釈されるところにある。したがって、これとは全く別の視座を取らざるをえないということになる。Pite がチャーサーの時代には頻繁に扱われた陳腐な主題であったとしても、現在までのところ、この詩の典拠として同定できるものが発見されていない以上、チャーサー独自の創作意図を探る読みも無益ではあるまい。⁴⁾ 詩全体は、ひとつの恋愛の終わりが経験的現実の出来事というよりも心的現象として描出されている。⁵⁾ 恐らくチャーサーが生涯抱き続けた愛の主題に関する思索の一端がここにも示されているであろう。ここではこの詩を語り手の意識の次元における表出として読むことによって、その提示を試みるつもりである。⁶⁾

I

Pite と Cruelte の関係がこの詩の基本的構造を成している。それは表面だけ見れば敵対関係である。ところが、意識の次元に置いて見ると、そう単純な関

係ではなくなる。更に、両方とも擬人化されており、それらが語り手あるいは相手の女性のいずれの属性なのか明確ではないという点が、詩の構造を一層複雑にしている。⁷⁾ 両者の関係に言及した中で最も意識の次元の表象的特徴を示しているのは、詩の後半の「愁訴状」の部分である。就中、次に引用する連の記述から窺知しうる。

Hit stondeth thus: your contraire Cruelte,
 Allyed is ayenst your regalye,
 Under colour of womwnly Beaute, —
 For men shulde not, lo, knowe hir tirannye, —
 With Bounte Gentilesse, and Curtesye,
 And hath depryved yow now of your place
 That hyghte “Beaute apertenant to Grace.”

(64-70) ⁸⁾

Cruelte の偽装による Pite の座の奪取とは、心的変化の現出の寓意化にはかならない。ひとつの座をめぐる両者の争闘は、愛の心理的葛藤を表象している。Cruelte が Beaute にかこつけて正体を晦ますというのは、心の変化を隠蔽し、それを正当化しようとする意識の発動の態様を指示する、と言える。換言すると、自己欺瞞の心理の表象である。Pite にとって座を Cruelte に奪われるのは、決して名誉なことではない。第9連、即ち「愁訴状」の第1連の Pite の “renoun” を憂えるという語り手の表明は、そういう欺瞞に対する批判として提示されている。

Pite と Cruelte の敵対関係は強固で改変の余地など全くない、という印象を与える。もしそうであれば、この詩は生まれなかったであろう。上に引用した一節は両者の不安定な関係と変化の可能性を示している。そして、その関係は、経験的現実の世界におけるふたりの人間の間の対立的な結び付きというよりは、寧ろひとりの人間の内部に重層的に存在するものを指示する。つまり、両者は

敵対と共存の重層した相対的關係を反復あるいは維持する、両面価値的存在として提示されている。敵対の度合いが極点まで高まった時、いずれか一方の力は極小となる。Piteの死とはこういう状態を指している。したがって、Beauteに偽装した Cruelte という記述は、意識の中に潜勢として存在する Cruelte の現勢化の過程を表象していると言える。欺瞞が生じるのは完璧と思われた Pite と Bounte や Gentilesse や Curtesye との同盟関係に生じた亀裂が修復不可能と自覚された瞬間である。なぜならば、Cruelte の発現が自覚されつつ Pite の属性である “Beaute appartenant to Grace” を装う意識が生起するからである。

II

しかし、その意識の深層には Pite の復位あるいは復活への希求が内在している。それが「愁訴状」全体を貫く基調をなしている。もし Pite の復位が成功すれば、欺瞞は消失し、再び安寧と平安がもどるだろう。だが、一度発出した Cruelte は版図拡大の手を弱めない。膨張する危険な同盟 (perilouse alliance) の中にあって、唯ひとり孤塁を守っているのが Trouthe である。その Trouthe も甚だしい苦境に陥っており、Pite の援助がなければいずれは Cruelte の攻囲に抗しきれずに、破れざる運命にある。欺瞞の寓喩形象は描かれていないにも拘わらず、ここに至って Trouthe の存在により Cruelte の発現に伴う重要な要素として、その伏在が浮彫りにされる。

語り手は第16連では死ぬまで “my trouthe I shal sustene” と言い、第1連においては以下のように記している。

My purpos was to Pite to compleyne
 Upon the crueltee and tirannye
 Of Love, that for my trouthe doth me dye.

(5-7)

この詩の前半の8連は、「愁訴状」を書いた後の心の変化を隠喩的に述べたも

のである。擬人法の形式をとらずに、語り手の生の気持ちとして吐露されているが、“trouthe”がこの詩の前半と後半を結ぶ鍵語であるのは明らかであろう。Trouthe の孤軍奮闘は Pite の復位・復活の可能性の証左であり、かつ「愁訴状」作成の動機なのである。

次に挙げる最後の3行は論理的に矛盾するとして、「愁訴状」と切り離して読むべきだとする意見がある。⁹⁾

Sith ye be ded — allas, that hyt is soo! —

Thus for your deth I may wel wepe and pleyne

With herte sore, and ful of besy peyne.

(117-19)

指摘されるところでは、「愁訴状」の書かれたのは Pite がまだ生きていた時であり、その死がここで明言されるのは撞着だとされる。経験的現実の次元のみに限って読めば、確かに上の指摘は正しい。だが、意識の次元に置いて見みると必ずしもそうはならない。前にも述べたように、Pite と Cruelte の関係は相対的かつ重層的であり、その生と死は意識の中で現勢となるか潜勢となるかだけであって、ひとつの様態が絶対的に固定化することはない。「愁訴状」が書かれる時点で既に、Pite の死は意識されている、即ち、その潜勢化は始まっているのであって、そうでなければそれが書かれる必要はなかったであろう。Pite の死を意識しつつ、なおかつそれを受容できないからこそ語り手は苦悩せざるをえないのである。「愁訴状」を書いた後も Pite の復活を希求し続けた彼が、遂に断念するに至る様子が前半には述べられている。

III

語り手は第1連の冒頭で“Pite, that I have sought so yore agoo”と述べ、第2連では、何年間も語りかける機会を探し求めていた時、Cruelte への復讐を願って涙ながらに Pite のもとへ駆けて行ったが、一言も口にしない前に“I

fond hir ded, and buried in an herte” と言う。第1連はこれから展開される心理変化以前、即ち「愁訴状」作成時の状態の説明であるが、第2連は明らかに全く異質の意識の生起を表象している。それは Cruelte に対する Trouthe の屈伏、Pite の死の受容、即ち欺瞞の顕在化であり、裏切りの自覚である。第3、4連には語り手の衝撃の大きさが如実に示されている。その自覚以前と以後の自己は峻別され、後者は否定されている。ここでは語り手自身の倫理的批判の表出が看取できる。¹⁰⁾

Pite の死は唐突なものではなかったにも拘わらず、他の誰も知らないことが彼には不可思議でならない。恐らく第6連がその理由を暗示しているであろう。

Aboute hir herse there stoden lustely,
 Withouten any woo, as thoughte me,
 Bounte parfyte, wel armed and richely,
 And fresshe Beaute, Lust, and Jolyte,
 Assured Maner, Youthe, and Honeste,
 Wisdom, Estaate, Drede, and Governauce,
 Confedred both by bonde and alliaunce.

(36-42)

上に示された寓喩形象は、C. S. Lewis の言う通り、それぞれが相互連関的に影響し合うことはない。¹¹⁾ しかし、それらの並置によって醸成される静態には、錯綜した心理の解剖学的図解を見るような趣がある。Pite の死は語り手にとって存在基盤の喪失を感じるほどの衝撃だったにも拘わらず、彼の内面にも外面にもそれと知られる変化が見られないという皮肉な事象の現前に、彼は戸惑っているのである。Pite の死によって欺瞞と裏切りの自己意識に苦悶し続けた彼は、Cruelte を中心とした新たな心理体制の中で自己疎外されているのだ、と言える。

上に見てきた愛における裏切りの心理的葛藤の過程は、『名声の館』のディーダーに対するアエネーイスの、トロイルスに対するクリセイデの、あるいは『善女伝』の諸話に扱われた裏切りの主題に通底するところがある、と思われる。それはまた『カンタベリ物語』の中に見えつ隠れつつしているものでもある。この詩の場合は語り手の意識に映じた心象風景の寓意として読むことによって、初めて露呈される。かなり早い時期から、それはチョーサーの意識に纏綿していたものと考えられる。そして、様々の表現様式を取り入れながらも、裏切りの主題は一貫して彼の意識の基底に存在し続けたのではないだろうか。

註

- 1) Cf. James W. Bright, "Minor Notes on Chaucer," *MLN*, 17 (1902), 278-80; F. J. Snell, *The Age of Chaucer* (1901/rev. 1906; rpt. New York: AMS Press, 1970), pp.132-36; Aage Brusendorff, *The Chaucer Tradition* (London: Oxford University Press, and Copenhagen: V. Pio and Povl Branner, 1925), pp.268-73; Earle Birney, "The Beginnings of Chaucer's Irony," *PMLA*, 54 (1939), 637-55; John Gardner, *The Poetry of Chaucer* (Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois University Press, and London and Amsterdam: Feffer and Simons, 1977), pp.65-95.
- 2) "Chaucer: The Complaint Unto Pity," *Criticism*, 1 (1959), 160-68. 彼はこの詩の理解のために次のような基本的姿勢を提示する—"The Complaint unto Pity" has two main aspects: first, there is its allegorical surface, the situation the poem purports to present [the apparent plot], and second, what it is really about [the real plot]." p.161.
- 3) "Structural Sophistication in 'The Complaint unto Pity,'" *Chaucer Review*, 13 (1979), 363-72. 彼は "Indeed perhaps the best way to read 'The Complaint unto Pity' is to see it as a rather sophisticated if somewhat problematical attempt to blend the amorous and the legal complaints and to note some of the advantageous effects that such a mixture has upon representative aspects of the poem, specifically on Chaucer's use of language and personification." (p.363) と述べている。
- 4) F. N. Robinson, ed., *The Works of Geoffrey Chaucer*, 2nd ed. (Boston, 1957; rpt. London: Oxford University Press, 1974), p.520. Cf. Renate Hass, "Chaucer's Use of the Lament for the Dead," in *Chaucer in the Eighties*, ed. Julian N. Wasserman and Robert J. Blanch (Syracuse: Syracuse University Press, 1986), p.25.
- 5) Cf. Wolfgang Clemen, *Chaucer's Early Poetry*, trans. C. A. M. Sym (1963; rpt. London and New York: Methuen, 1980), p.179.

- 6) 従って, John Norton-Smith の次のような見解とは対蹠的である。"In the *Complaint to Pity*, Chaucer (while not choosing to combine *narratio* with complaint) realized that a complexity which in some ways corresponds to plot sequence in narrative had to be invented. For *Pity* Chaucer constructed an 'allegorical episode' where any pattern which would give the simple impression of a consistent sequence of events was avoided. Instead, the episode contains a series of compressed or oblique conceits, which, although they offer no consistent *significatio*, yet correspond to an actual psychological occurrence in the lady's mind." *Geoffrey Chaucer* (London and Boston: Routledge and Kegan Paul, 1974), p.21.
- 7) Cf. Wolfgang Clemen, p.183.
- 8) 引用は全て Robinson 版による。
- 9) John Norton-Smith, pp.22-23. Charles J. Nolan, Jr., pp.368-69.
- 10) Cf. "Chaucer's abiding interest in the value of experience and authority and in the extent and limits of earthly love and human power rarely reveal a consistent or conclusive morality. More often than not, they suggest how difficult it is to evaluate human behavior and human goals in light of traditional ethical doctrines." Larry Sklute, *Virtue of Necessity: Inconclusiveness and Narrative Form in Chaucer's Poetry* (Columbus: Ohio State University Press, 1985), p.21.
- 11) *The Allegory of Love* (1936; first issued as a paperback, 1958; rpt. London, Oxford and New York: Oxford University Press, 1975), p.167.